

博物館における歴史展示のあり方と実態

Desirable Conception and Real States of Historical Display in the Museum

新井重三* 高井芳昭**
Juzo ARAI Yoshiaki TAKAI

I 歴史展示のあり方

ここでは、歴史展示のあり方の一端を示すにとどめる。

1. 歴史展示と歴史的情報の提示

(1) 歴史展示と「歴史資料」

従来、一般に歴史展示とは「歴史資料」を用いた展示だとされてきた。これは、展示の分類が資料の種類を基準にして行われてきたためである。(註1)

この基準に依れば、美術展示は「美術資料」を扱った展示であり、理工学展示とは「理工学資料」を扱った展示ということになる。

では資料が展示の分類の正当な基準であることを証明するには何が必要であろうか、それは、種類の異なる資料間に一線を画することができるということ、換言すれば「歴史資料」と「美術資料」「理工学資料」等の資料の範疇が明確であるということである。

何故ならば種類の異なる資料間の境界が不明確であり、ある種類の資料の実態が曖昧であれば資料の種類に対応する展示の種類というものが、境界が不明確で、実態が曖昧なものとならざるを得ないからである。そして、このような展示の分類は、あまり意味をなさないように思われる。そこで、まず、異った種類の資料間に一線を画することができるか否かを検討し、資料が展示を分類する基準になりうるのかを明らかにしたい。もし、資料が展示を分類する基準になりうるのであれば歴史展示とは歴史資料を用いた展示であるという認識の上に立ててこれからの考察を展開できるのである。

写真1, 2は、国立科学博物館の科学技術棟の展示、理工学展示である。ここで展示されている理工学資料は

日本刀である。次に写真3・4は埼玉県立博物館の美術展示室の展示である。ここでは、日本刀が美術資料として展示されている。最後に写真5・6は、埼玉県立博物館の歴史展示室の展示、歴史展示である。ここでは歴史資料として日本刀が展示されている。以上から、日本刀という資料が、場合によっては、理工学資料にも、美術資料にも、歴史資料にも分類されるということがわかる。

このような例は、単に日本刀だけにとどまらない。佐々木朝登は、実例を挙げ多くの考古、民俗資料が美術資料として扱われるという可能性を示唆している。(註2) また、後藤和民は、埴輪の例を挙げ、「同じ美術作品でも、これを歴史資料として取扱う場合もあり、同じ歴史資料でも、これを美術作品として鑑賞することもできるのである。(註3)」と述べている。さらに、PRアダムスは、「真の美術作品であるゴヤのウェリントン公」が歴史資料として扱われている例や、科学博物館の標本の内在的な美や美術博物館の「収藏品」の歴史的な内容について指摘している。(註4)

以上から明らかなように、「歴史資料」「美術資料」「理工学資料」等、種類の異なる資料間に、明確な一線を画することは、きわめて困難である。多くの資料が、歴史資料として、ある場合には美術資料としても、また別の場合には、理工学資料としても、扱われる可能性がないとは言えないからである。(註5) つまり、ある種類の資料、たとえば歴史資料というものの実態は必ずしも明確ではない。従って、資料を展示の分類の基準にすることは適切ではない。そして、このことは、従来の「歴史展示は歴史資料を用いた展示である」という考え方も改められねばならないことを意味する。

* あらい じゅうぞう 埼玉大学教育学部 博物館学研究室

(原稿受理: 1981年10月15日)

** たかい よしあき 丹青社 科学造形研究センター

では、一体歴史展示とは何なのであろうか。

まず、歴史展示とは何かを把握することなしには、歴史展示のあり方について考えを進めることはできない。実際に即して展示を分類する基準を明らかにし、その基準にもとずいて歴史展示というものに定義を与えたい。

(2) 歴史展示と歴史的情報

展示の分類の基準を求めるために、種類の異なる展示を比較し、本質的な相違点を求めた。この際、比較が容易なように、展示資料が共通している展示を考察の対象とした。先に示した、日本刀に対する三種の展示がそれである。

写真1・2は、理工学展示である。日本刀は鉄の鍛造の一例として展示されている。ここでは、日本刀の工程と鍛造という技術についての情報が提示されている。すなわち、ここでは理工学的情報が提示されている。

写真3・4は、美術展示である。日本刀は十分に研ぎ上げられ、特製の台上でスポットライトを浴び、刃先を美しく光らせている。ここでは、美的情報が展示されている。(註6)

写真5・6は歴史展示である。「宿場と河岸場」という展示の中で、日本刀は、近世の川俣関所で用いられた武具の一つとして展示されている。ここでは、歴史的情報が提示されている。(註7)

つまり、理工学展示では理工学的情報が、美術展示では美的情報が、歴史展示では歴史的情報がそれぞれ展示されている。このことから、展示の種類は、その展示が提示する情報の種類に対応すると考えることができよう。

展示は、その展示する情報を基準にして分類することができるのである。従って歴史的情報を提示する展示が歴史展示だと言える。歴史展示とは、いわゆる、「歴史資料を用いた展示ではなく、(註8)歴史的情報を提示する展示なのである。

2. 歴史展示と主題(主張)の明確な歴史叙述

(1) 歴史叙述としての展示

さきに、歴史展示とは、歴史的情報を提示する展示であると述べた。この考え方に立って、歴史展示のあり方を考えるならば、歴史展示のあるべき姿は、より価値の高い、歴史的情報を提示する展示だと言える。では、より価値の高い歴史的情報とはどのようなものであろうか。以下に示す「歴史学のプロセス」(註9)という論理的なモデル(註10)をもとに考えてみたい。

◎ 歴史学のプロセス

素材 → 批判 → 解釈 → 叙述

素材とは史料である。そして史料が誇るものはあくまでもその作者が伝えようと欲するものである。つまり史料の中の情報には虚偽及び作者の立場に制約される偏りが必ず含まれている。それに対して、批判を経た情報は、事実と確定されたものである。このことから、素材の段階の情報より、批判を経た段階の情報の方が価値が高いと思われる。

次に、批判の段階の情報と解釈の段階の情報を比較する。批判を経た情報は「事実」である。しかし、その事実を寄せ集めたものが歴史になるのではない。歴史とは選択を前提とする。歴史的事実というもの一つをとってみても、それは、歴史家によって過去の無数の事実の中から意味づけられ、選び出されたものなのである。そして、事実に対する意味づけが変われば、また、歴史も変わらざるを得ないのである。つまり意味づけ、言い換えれば、解釈というものは歴史にとって重要なのである。このことを、E.H.カーは「歴史の生命である解釈」(註12) 齊藤孝は「事実がそのまま歴史であるのではなく、事実の意味づけが歴史である」(註13)と表現している。このように意味づけられ、選択された事実は、単なる事実よりも価値が高いと思われる。解釈の段階の情報は批判の段階の情報より価値が高いように思われる。最後に叙述の段階になって、この情報が定着される。この段階では情報は解釈の段階より、整理されている。その意味で解釈の段階より価値が高い情報であろう。

以上に見てきたように、歴史的な情報は、歴史学研究のプロセスの中で価値を高めていく。そして最も高い価値を獲得するのは、このプロセスの最終段階の叙述においてである。前述したように、歴史展示のあるべき姿は、より高い歴史的情報を提示する展示の中に求められねばならない。それ故、歴史展示のあるべき姿は、歴史叙述としての展示の中に求められねばならないのである。歴史叙述としての展示こそ、歴史展示のあり方を語る際には欠くことのできないものなのである。

(2) 明確な主題(主張)

わかりやすい文章とは、まず第一に著者の言いたいことがはっきりしている文章であろう。これは別の言葉で言うならば、主題、強い場合には、主張が明確な文章ということになる。主題とは、「こういうことを、こんなつもりで書く」(註16)ということである。もし、主題、主張、あるいは「中心になる考えが明確でなく、また明確であってもそれに関係のない材料を文章に取り入れると、その文章はごたごたした文章、何を述べようとするのかがつかみにくい文章、支離滅裂な文章になる。」(註15)それ

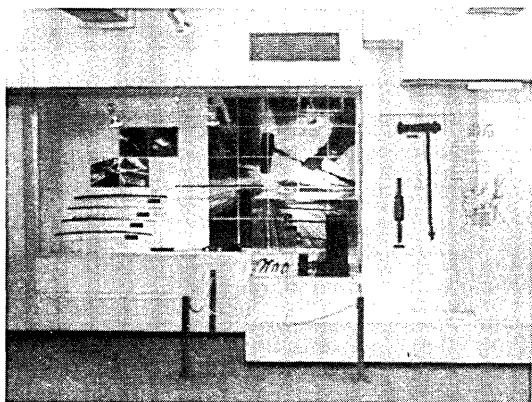


写真1. 理工学展示；鉄の鍛造を示す展示。
日本刀を例にとり、その製作の工程と道具類を
展示している。

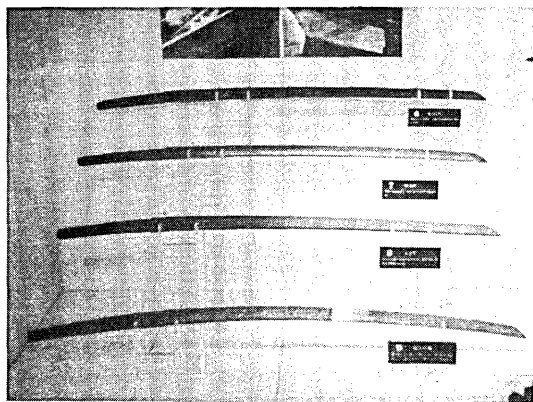


写真2. 理工学展示；右の展示の部分。
工程の段階ごとの日本刀が展示されている。

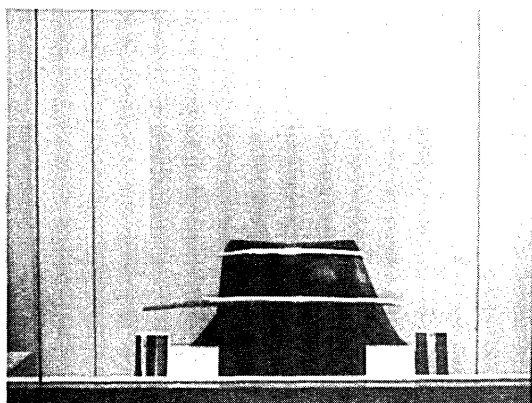


写真3. 美術展示；日本刀の美しさを展示。
研ぎ上げられた日本刀が照明を浴びて妖しく刃
を光らせている。

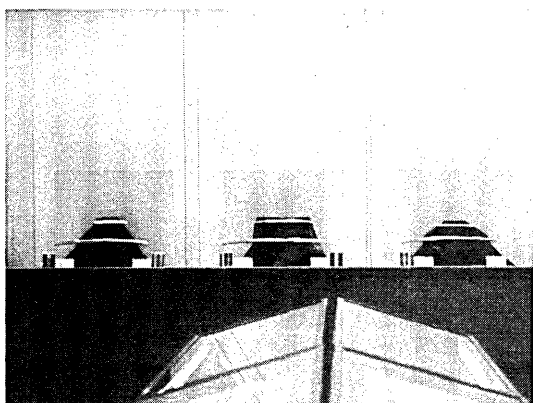


写真4. 美術展示；右の展示の遠景。隣合った資料
の間には一定の関係を見出すことができない。

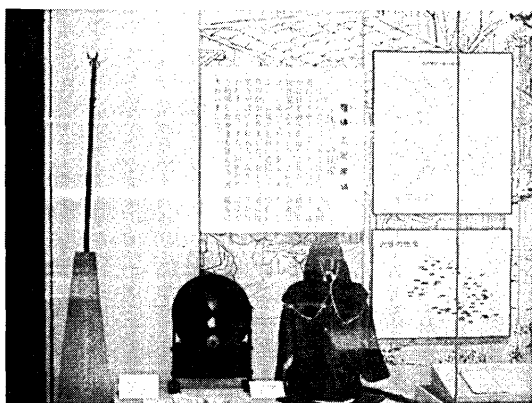


写真5. 歴史展示；「宿場と河岸場 — 江戸への往
還 —」がテーマ。日本刀は関所の武具の一つ
として展示。



写真6. 歴史展示；右の展示の部分。中央の細長く
黒いものが日本刀である。

故、主題、主張を明確にすることが大変重要になってくる。つまり、「『これだけは絶対に読む人に伝えたい』ということのを頭に置いて、できるだけテーマを絞ることが、文章を書く第一歩なのである。」と言われるゆえんである。

なお、主題、主張を明確にすることの重要性は、理性に訴える展示であれば、博物館の展示全てに対してあてはまる。というのは、主題、主張を明確にすることはメディアの問題ではなく、思考の統一性の問題だからである。そして、文章と博物館展示とでは、メディアこそ異なれ、思想を伝達するという機能は共通していると思われる。

なお、定義から、理性に訴える博物館の展示とは「展示資料（もの）を用いて、ある意図のもとに、…展示企画者の考えや主張を表現、説示（Interpretation）することにより、広く一般市民に対して…理解と、発見と探求の空間を構築する行為である。」^{（註17）}とされる。

すなわち、理性に訴える博物館展示とは、「ある意図のもとに、展示企画者の考えや主張を表現、説示」したものである。つまり、この場合の展示は思想伝達のためのものと言える。

それ故、理性に訴える博物館展示は、感性に訴える美術博物館等の展示に對置されるが故に主題、主張を明確にする必要がある。主題、主張を絞り、いいたいことをはっきりさせてこそ、展示の提示する思想は、一般市民にわかりやすいものとなるだろう。

少なくとも、展示のあるべき姿を考えると、主題、主張を明確にするという点を無視することはできない。特に、歴史展示へのあり方の一形態を示す「歴史叙述としての展示」においては、歴史叙述というものが、まさに文章表現であるために、主題、主張を明確にするということとはできない。

歴史展示のあり方は、単に歴史叙述としての展示というだけでなく、展示の主題、主張も明確であらねばならないのである。

以上、歴史展示のあり方を、展示の提示する情報という面から追求した。そして、歴史展示のあるべき姿を「主題、主張の明確な歴史叙述として展示」と把握した。この考え方は、歴史展示のあり方の一端を示すものではあるが、しかし、これによって、歴史展示のあり方の全てが明らかになった訳ではない、歴史展示のあり方については、ほとんど何もわかっていないというのが偽らざる所である。しかし、今まで明らかにし得た成果をもとに、歴史展示のあり方を示す展示が実在するのを確めて

みたい。つまり、主題、主張の明確な歴史叙述としての展示というものが実在するのかを調べてみたいのである。

II 歴史展示の実態

1. 調査方法

（1）調査の対象

関東地方を中心とした、代表的な歴史博物館16館を調査対象とした。なお、この16館の内には、考古学博物館、民俗博物館が含まれている。^{（註18）}

（2）展示の観察

実際に行われている歴史展示の中から、「主題、主張が明確な歴史叙述としての展示」を見つけ出すために、展示を観察した。なお観察のポイントは次の通りである。

- ①歴史的情報を提示しているか。つまり、歴史展示か
- ②歴史的な意味が表明されているか。^{（註19）}つまり、歴史的叙述か。
- ③主題、主張を明確にしているか。

（3）学芸員からの聞き取り

主題、主張の明確な歴史叙述としての展示を発見した場合、それが求める展示であるという裏付けを得るために、また、逆に、ある館の展示が求める展示ではなかった場合、何故それが、主題、主張を明確な歴史叙述としての展示でないのかを明らかにする手掛りを得るため、多くの学芸員から意見や説明を受けた。

なお、聞きとりのポイントは、次の3点である。

①歴史学研究

博物館活動の基盤である、研究活動と展示活動は絶対に切り離して考えることができない。^{（註20）}

また、本稿で、歴史展示のあり方として掲げた「主題、主張の明確な歴史叙述としての展示」を実現するためには、歴史学研究は必要不可欠なものである。^{（註21）}

しかしながら、博物館における調査研究の必要性が、全ての人から認められている訳ではない。^{（註22）}それ故、歴史学研究が行われているか否かは、歴史叙述としての「展示」が行われているか否かを知る重要な指標となる。

②歴史観

歴史叙述の中の事実とは、歴史家によって選択され、解釈された事実である。従って、歴史叙述の背後には、選択の基準、解釈の原理である歴史観が存在していなければならない。^{（註23）}このことは「歴史叙述としての展示」として、歴史観が必要不可欠であることを意味する。

だが、それにもかかわらず、歴史観をタブーとする



写真7. 提示型歴史展示；飛鳥時代の衣装の復元展示。
説明はごくわずかで、歴史的な意図的信息が少ない。

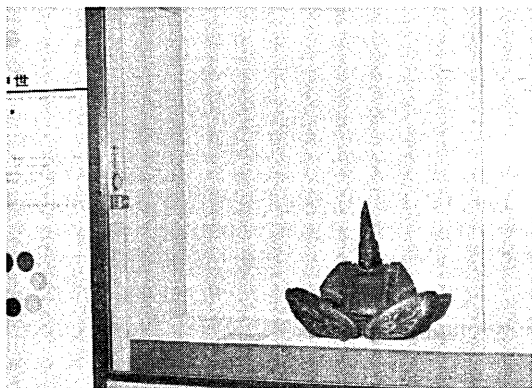


写真8. 事実列举型歴史展示；歴史的な意図的信息を呈示しているが、歴史事実の列举に止まっている。

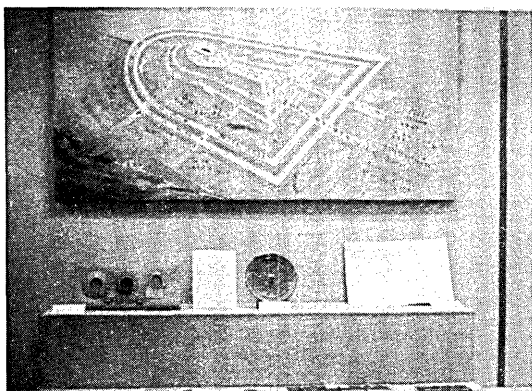


写真9. 通史型歴史展示；歴史的事実と共に歴史的解釈も提示されているが、その歴史的意味は不明確である。

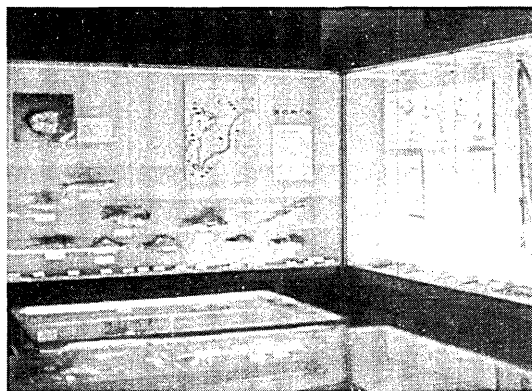


写真10. 歴史記述型歴史展示；できる限りの事実（資料）を用いて、歴史的解釈が明確に表明されている。



写真11. 工程展示；歴史的な意図的信息を含んでいないと思われる。臼の工程を表現しただけの展示である。

歴史博物館もある(註24)

それ故、歴史観というものが、「歴史叙述としての展示」否かを判断する重要な指標になると考えた。

③明確な主題、主張

歴史展示のあり方を考える時、主題、主張が明確な言いたいことがはっきりした歴史展示が好ましいということは既に述べた。しかし、主題、主張を明確に打ち出す展示をしない歴史博物館もある。(註25) によって、展示の主題、主張が明確になっているかどうかを、聞き取り調査のポイントに選んだ。

2. 歴史展示の実態

現在行われている歴史展示を上述の方法で調査した結果、歴史展示を次の5つの類型に分けることができた。それらは、(1)提示型、(2)事実列挙型、(3)通史型、(4)歴史記述型、(5)その他(工程展示等)の5つである。

以下に、例を挙げ、各類型の特徴について述べる。

(1) 提示型歴史展示

解説がほとんどなく従って、歴史的な意図的情報をごくわずかしき提示していない展示である。鑑賞に耐える逸品を展示し、見学者に資料の美しさを味わってもらうことを目的としている点でも、美術展示と区別することが難しい。

ものそのものの芸術的価値または美的価値を提示する「提示型展示(註26)」という要素を強く持っていることから、これを提示型の歴史展示と名付けた。

写真7は提示型歴史展示の一例である。これは飛鳥時代の衣装の形態を復元し、人形に着せ、展示したものである。

ただし、復元衣装は絹で作られているので、原物とは素材を異にするとおもわれる。これは、絹の美しさを見学者に見てもらふことも展示の目的の一つになっているためである。

なお、この展示の解説は「飛鳥時代貴族社会の女子衣装姿(高松塚古墳壁画より復元)」のみである。他に、歴史的な意図的情報は提示されていない。

歴史的な意図的情報がわずかしき提示されていないことと、美的価値をも提示していることが提示型歴史展示の特徴である。

(2) 事実列挙型歴史展示

この型の歴史展示の提示する情報は、歴史上の事実のみであり、その事実の歴史的意味を含んではない。言い換えれば、この型の展示にはその展示で取り上げている事実の歴史的意味が表明されていないのである。

写真8は、ある館の「中世」の展示である。この展示は、「伝・源頼朝像」の複製と、次のような解説から成り立っている。「治承4年(1180年)8月、源頼朝は以仁王(後白河上皇の皇子)の令旨をかざして挙兵した。石橋山の緒戦で敗れたが安房に渡り、南関東の武士団をひきつれて、先祖以来の由緒の深い鎌倉へ入り、ここを本拠と定めた、まず侍所を置き、ついで公文所、問注所を設けた。文治元年(1185年)西国の平氏を討滅し、守護地頭を設置するなど、武家政権の確立を進めた。」

この解説、すなわち、この展示では、侍所、公文所、問注所、守護、地頭の設置等々の歴史上の事実は説明されている。しかし、これらの事実の歴史的意味は明かにされてはいないと思われる。よって、この展示は事実列挙型歴史展示の一例と言える。

(3) 通史型歴史展示

史実だけでなく、その事実の歴史的意味も表明している展示である。

しかしながら、主題、主張の明確さに欠け、言いたいことが不鮮明である点で後に述べる歴史記述型、「主題、主張の明確な歴史叙述としての展示」と異なる。

通史型歴史展示の例を写真9に示す。これは、古墳時代を扱った展示である。古墳からの出土遺物が展示されている。ここでは、5世紀の単独、大形の前方後円墳から、6・7世紀の小円墳(しかも場所によっては群集墳への変化という事実を「新しい大陸文化の影響を受けて国内での生産が盛んになり、また社会のしくみも変化したために、古墳を築くことができる階層の人々が多くなった」ためと解釈している。だが、この解釈は「社会のしくみも変化した」という例からもわかるように、抽象度が高く妥当性も高い反面、漠然とした感じを受ける。つまり、言いたい事が明確でないと思われるのである。

以上が事実を列挙するだけではなく、解釈を表明しながら、それでいて、主題、主張の明確さを欠く、通史型歴史展示の一例である。

(4) 歴史記述型歴史展示

この型の歴史展示こそ「主題、主張の明確な歴史叙述としての展示」である。展示を用いて歴史叙述が展開されているだけではなく、展示で主張しようとしていることが、はっきりとしているのである。

写真10は歴史記述型の展示の例である

この博物館では「貝塚を残した村びとたち」というテーマを設定し、このテーマを解明するために、調査、研究を行って来た。調査研究の中には発掘調査だけではなく、実験考古学的な研究も含まれている。実験考古学的

な研究のうち、特筆すべきものは、縄文土器の製作には高度の技術、熟練が要求されると判明したからである。このことは、土器作りのムラ、さらには、共同体間の分業が存在したという一つの証拠として現在この館に展示されている。

さて、この館では、貝塚を残した村びとたちの、社会生活を明らかにするための調査研究の蓄積の上に立って、「貝塚は干貝を作る村の跡だった」という説を打ち出し展示している。

見学者は、導入部で、貝塚とは何かという問題提起を受ける。次いで縄文時代を通じて、東京湾沿岸の貝塚の変遷と貝塚が、単なるゴミ捨て場ではないことを知らされる。続いて縄文人の生活を見学者は見ることになる。ここでは縄文人の食糧が狩猟、採集によるものであったこと、石器が重要であったこと、貯蔵用土器の出現とそれに伴う精神生活の変容とが展示されている。そして最後に、土器作りの存在とムラ、工偶作りのムラ等、共同体間の分業の存在と石材の入手困難な加曽利に石器が存在すること、さらに、貯蔵用食糧、弥生時代に入って衰退する貝塚に始まる製塩等の事実を総合して貝塚が干貝作りの村跡であることが見学者に納得できるように展示されている。

この展示では、確かな事実に基づいて、貝塚に対する明確な歴史的解釈を下しているのである。それ故、この展示を「主題、主張の明確な叙述としての展示」と呼ぶのである。

(5) その他(工程展示等)

その他に展示されるのは、歴史的情報を提示していると認め難い展示である。

写真11は臼の工程のみを展示したものである臼と社会との関係、臼と歴史的時間との関係が、まったく示されていないために、ほとんど歴史的情報を提示していないように思われる。なお、(5)のその他に含まれるのは、いわゆる民俗展示に限られている。

以上、歴史展示の実態を見た時、「主題、主張の明確な歴史叙述としての展示」は、16館中、わずかに1館に過ぎなかった。なお、この1館も、後述するように大きな問題点をかかえているのである。次の項で、これらの歴史展示の問題を、考えてみたい。

3. 歴史展示に関する現実的問題点

歴史展示を実施する場合に現実的に起きる問題点を整理してみると次のようになる。

① 展示替に際して学芸員の思想を貫くことの困難な

問題

② 歴史記述型歴史展示の基礎となる史観の扱いに関する問題

③ 民俗展示と歴史展示との類似点と相異点に関する問題

これらの問題点について、以下考察してみることにする。

(1) 学芸員の思想を貫くことの困難な問題

(a) 歴史記述型の展示を実施している館の場合

歴史記述型の展示を行っている館は16館中わずか1館にすぎず、その1館でも展示替に当たっては問題が生じたという。博物館における展示替の必要性は、既に指摘されている。^(註27)さて、歴史叙述としての展示において、展示替は重要な意味を持っている。単なる畳替え的なものではない。すなわち、「歴史が常に現在の眼からする過去の把握である。」^(註28)ために、歴史は絶えず書き替えられなければならないのであり、歴史叙述の更新にとまって、歴史叙述としての展示も更新されなければならないからである。

ところが、実際に、この歴史記述型の展示を行っている館では、展示の更新が相当困難な状況にあると推察される。それは経済的な問題だけでなく、また、新しい研究の蓄積が十分でないという点もある。学芸員の数に限りがあり、究研時間や予算の確保にも制約がある。しかし、それにも増して大きな問題は前述した「現在の眼からみる過去の把握」においてひとによって、基本的相違点がある場合が多いことである。展示の責任者が判然としていない日本の多くの博物館にあっては、一般的には館長の責任に帰するであろう。しかし、実際の担当者は学芸員である。この場合は学芸員の歴史観に立つ歴史記述型展示が全面的に認められるとは限らない。すなわち、新しい眼で見直す展示替を可能にする上で、大きな課題が横たわっていると言えるだろう。

また、行政上の都合で学芸員が配置替えされる場合があるが、この場合には蓄積された情報までが消失するおそれがあり、致命的な損害をこうむることがある。歴史記述型の展示は、更新されるべき展示内容が保証されてこそ価値がある。その意味では学芸員の配置替は慎重を期すべきである。

(b) 歴史記述以外の型の歴史展示を実施している館の場合

博物館における展示の最高責任者は前述したとおり館長であるという通念が一般的である現状を考えると、ある特定の学芸員の歴史観に立った展示が常に支持され

るとは限らない。そこに、歴史記述型の展示が普及し難い大きな問題点があると思われる。筆者等がいくつかの館で聞きとり調査を実施したなかで、いまだかつて、館内において歴史展示を計画する場合、それぞれの学芸員の立場を明確にするという意味で「歴史観」について討議したことは一度もないということを聞いた。それが何を意味するのかは興味ある課題である。最も単純に考えれば、歴史記述をしない歴史展示、すなわち、提示型歴史展示、事実列挙型歴史展示、それに通史型歴史展示のみを扱ってきた博物館にあっては「歴史観」はお互いに関係ないことであるということの問題にしようとも思わなかったとも解釈できる。しかし、いやしくも歴史学の研究者をもって任ずる学芸員にしてみれば「歴史観」に無関心である筈はない。歴史記述型の展示も頭の中に画いたこともあったかも知れない。けれども足ぶみせざるを得ない何かがある。その何かが今後、歴史展示の大きな課題となるのではないだろうか。

(2) 研究時間

学芸員は研究をする時間が少ないということは、博物館の職員の絶対数が不足しているということであろう。そして、この場合の職員の不足は、予算が制限されていることにも起因する。この傾向は運営資金の少ない博物館において、より顕著である。

だが、研究ができなければ、歴史叙述としての展示が実施できないことは自明である。

ここでも、歴史記述型の展示の実現は、予算、学芸員数という面からもはばまれているのであろう。

(3) その他の問題点

歴史展示は通史であるべきなのか。通史以上には出られないものなのであろうか。また、民俗展示は、歴史展示とは異質なものであろうか。これらのことが歴史展示というものを考える際、大きな制約となっていることは、否めない。それぞれが批判的に検討される必要があろう。

以上に述べてきた問題点は、歴史記述型の展示の実現を妨げる要因であった。そして、これらの問題点の内歴史叙述としての展示にとって本質的な問題点、すなわち、歴史観、特定の意見の証明、研究等は、博物館をめぐる制度や組織とも関連があるように思われる。また学芸員の責任と権利とも深くかかわっている。その意味では博物館の自治、博物館の中立的立場が具体的に保証される必要があるように思われる。博物館における歴史展示がさらに一步を進めて改善されるために必要な条件として課題を提起する次第である。

〔脚 註〕

- (1) 「博物館を分類する場合、最も一般的には取扱う資料を基準にして分類される。歴史博物館、美術博物館、自然史博物館、理工学博物館、それに動植物園、水族館などがそれである。（新井重三『博物館白書』日本博物館協会、1975）

また、博物館の展示の種類も博物館の種類に対応すると考えるのは自然である。それ故、展示資料を基準にして分類されていると思われる。

また、小川知二が『博物館概論』学苑社、昭和55年の中で「歴史資料を用いた展示が展示であり、「美術資料を用いた展示が美術展示である」という前提に立って論を展開していることも、資料が展示の従来の分類基準であるということの一つの証拠と言えよう。以下に小川の論文の抜粋を掲げる。「歴史は、それ自体として自己を主張するものではなく、関係性のなかでこそ意味をもつ。」そして「（歴史）展示において、資料は個々に即してその関係性が対象化され象徴となってあらわれる。」それに対する「美術資料作品は、人間の営みを自立した普遍的な存在として表象し、生活や時代を超えて自己を主張する。」そして、「（美術）展示、公開は、自立した資料が自己主張をより完全に行える場として整えられねばならない。」

なお、ここでは、歴史資料と美術資料の相違は、資料の属性に起因するものと捉えられていることは注目に値する。

- (2) 「考古学的な遺物の中でも、縄文時代の土偶、土器の形と文様 弥生時代の土器、銅剣、銅鏡、銅 古墳時代の玉類、馬具、武具、甲冑、太刀、埴輪などは、それ自身が十分に美術的である。また、民俗資料においても、薬製品、織物、染物、漆器、祭りの器物や山車、家具から大工道具、農具などはそれぞれに美として通用する面を数多く見出すことができる。」（佐々木朝登「いわゆる考古、民俗の展示における問題点」物質文化No.35、1980。）
- (3) 後藤和民（共著）『博物館学講座』第1巻雄山閣1979。
- (4) P R アダムス（共著）『博物館組織その実際的アドバイス』ICOM日本委員会、1965。
- (5) 一つの物は、歴史的或いは、自然史的な要素と、美的な要素、さらに理工学的な要素を持っていると思われる。第一に、あらゆる物が、現在のこの一瞬に至るまでの時間的過去において生み出されたものである。それ故、その物が、人間によって作り出されたものな

らば、「時間における人間の学」^①である歴史学の対象となるし、また、その物が自然の力で産み出されたものならば、自然史の対象となる。このことから、物は歴史的、または、自然史的要素を持つと考えられる。第二に、美の性質のゆえに、あらゆる物の中に美的要素が含まれていると考えられる。何故なら、「美というのは、いろいろの世界で、ほんとうの自分、あるべき自分、深い深い世界にかくれている自分にめぐりあうこととだ」^②。だから「美のみは、どんな人にも、それなりの美的感動として充実した姿で体験され、しかも、その契機は日常生活の随所に見いだされる。その辺の垣根のわずかな緑でさえも、日に映えて美しければ、われわれに喜びとなる」^③。「つまり、存在する限りのものは、なんらかの意味で美しい」^{②③}のであるから。第三に、あらゆる物には、組成、生成の過程が存在する。それらを究明することができるということは、あらゆる物に、理工学的要素が備わっていることを意味する。以上から、ある一つの物は、歴史的、或いは自然史的、美的、理工的要素を持つと考えられる。だから、ある一つの物を固定的に歴史資料とのみ捉え、美術資料、理工学資料とはなり得ないと考えることは危険なのである。

ただし、だからといってあらゆる場合に、ある一つの歴史資料、または自然史資料にも、美術資料にも、理工学資料にもなるとは考えていない。物が資料として認められるためには、一定の条件を満たしていなければならないからである。たとえば、一般的に「全ての『もの』は歴史資料として展示し得るし、また確かに歴史展示資料」^④と思われる歴史資料の場合でも「その資料が『史料として存立すべき条件や根拠というべきものが、その資料とともに添加され記録されていないければ、その『もの』自体はなんらの役には立たないことになる。』

たとえば、その素材が金銀や玉類などのようにいかに高価なものであっても、またその細工の技巧がいかに美術的に高度のものであっても、それを所有した人間集団やその所属時期や場所及びその歴史的意義が把握されていないければ、それは単なる骨董品にすぎず、史料としてはなんらの価値もない」^⑤。」ということになる。

①マルク・ブロック『歴史のための弁明 - 歴史家の仕事 - 』讃井鉄夫訳、岩波書店、1956年。

②中井正一『美学入門』朝日選書、1975年。

③今道友信『美について』講談社現代新書1978年。

④矢島国雄「歴史展示論(序)」教職、社会教育主事、学芸員課程年報No.2、明治大学、1980年。

⑤後藤和民(共著)『博物館講座』第6巻、雄山閣1979年

(6) 「美術情報」という語は奇異に感じられるかもしれない。情報を「知識」と捉え、「美的体験というものは、直感と感動に基づくきわめて非分理的な感情体験」^①と理解するならば「情報」と「美」というものは相容れないもののように感じられるからである。

しかしながら、美的情報というものも存在すると思われる。何故ならば、情報は単に知識にとどまらず、「環境因子」とであるとされる。そして環境因子の中に美も包摂されると思われるからである。そのことについて、吉村典夫は、佐々木敏夫の説を引用しながら、「『個々の生物になんらかの影響を与えた外界は環境因子である。』この定義は、情報の本質を良くあらわしていると筆者は考える。」と述べ、さらに、「佐々木の『情報は環境因子である』とした説はだいたい、『環境因子は、非意図の情報である』と考えていい。博物館で取り扱うものでは、芸術作品などがその例である」^②。」としている。

①荒木伸介「いわゆる美術品の展示上の諸問題について」物質文化No.34、1980年。

②吉村典夫(共著)『博物館講座』第8巻雄山閣、1979年。

(7) ここで言う「歴史的情報」とは、過去のでき事に関する情報という意味である。

歴史的情報の定義も、歴史をどのように捉えるかということに密接に関わってくる。そして歴史をどのように捉えるかは「私たちの時代的な地位を反映し、また、この答えは、私たちが自分の生活している社会をどう見るかという更に広汎な問題に対する私たちの答えの一部分を形作っている」^①。つまり、歴史の捉え方は、一様ではない。そこで、歴史というものを「歴史は、過去の出来事であり、またそれについて記したものである」^②と大まかに議論の余地のない形で捉えたその上で、歴史的情報を定義したのである。

①E. Hカー『歴史とは何か』清水幾太郎訳、岩波新書、1926年。

②齊藤孝『歴史と歴史学』東京大学出版会1975年。

(8) 「歴史資料」を用いた展示が歴史展示であるという考え方は、危険である。すでに存在する「歴史資料」というものを並べただけで、極端な場合には陳列に近いものであっても、それは、歴史展示として存在するこ

とが許されるからである。

歴史展示とはあくまでも歴史的情報を提示する展示でなければならない。そして、歴史資料というものは、所与の存在ではなくこのような歴史展示の中に位置づけられた資料が歴史資料と呼ばれるべきである。

- (9) 村上義彦「歴史展示の実際と展望(2)～歴史展示の範囲と方法～」埼玉県立博物館紀要No 5, 1979年。

- (10) この「歴史学のプロセス」は、実際の研究の順序を示すものではない。歴史研究のプロセスの一つのモデルである。「一定の史料を解説し、批判し、解釈することによって、ある事実について何らかのイメージを得る……中略……しかし、史料から歴史へという、この研究の手順とは、歴史研究として踏むべき論理的階梯を提示しているのであって、実際の研究はこのような順序で行なわれるのではない。」(斉藤孝『歴史と歴史学』前出)

- (11) 歴史にとって選択と意味づけが不可欠であることを和歌森太郎は、次のように述べている。「歴史として人々にとらえられるものは、過去における人間の営みのすべてではない。それは、過去の実績から、人それぞれが、ある立場、ある視点で、何らかの意味をもたせて、選択し、構成したものである。文章で綴るにしても、口頭で語り伝えるにしても、歴史とはそのように選ばれ意味づけられたものである。」(和歌森太郎『日本史の虚像と実像』角川文庫) 1974年。

- (12) E. H. カー『歴史とは何か』前出

- (13) 斉藤孝『歴史と歴史学』前出

- (14) 樺島忠夫『文章構成法』講談社現代新書, 昭和55年

- (15) 平井昌夫『新版, 文章を書く技術』現代教養文庫

- (16) 板坂元『何を書くか, どう書くか — 知的文章の技術』光文社, 1980年。

- (17) 新井重三(共著)『博物館学講座』第7巻雄山閣 1981年。

- (18) 考古学博物館及び、民俗学博物館を歴史博物館の中に含めて考えた根拠は次の通りである。

「考古学は、補助学といった貧相なものではなく、歴史学の源泉ともいうべきものである。したがって、その資料は本質的に歴史の資料であって、文献記録の単なる挿絵ではない。つまり、ほかの歴史家とまったく同じように、考古学研究者の任務は、時代と社会環境の産物であるわれわれ人類、そのわれわれの住む人類社会の形成過程を調査し復元することにある①。」また、民俗学については、次のような考え方がある。

「歴史学においては、発展という側面を強くとらえ

ようとする。これに対して、民俗学は停滞面に注目するが、発展を追跡する歴史研究といえども、その問題解決過程の中で、発展的に前進した筋だけに目を注いで、その解決の外にあった、あるいは解決をはばんだような、伝承的な生活面や意識に無関心でいては、結局正しい歴史発展の姿を明らかにできないということになる。したがって、歴史学の研究においても、そうした伝承的、停滞的に各時代に遣っている事態に目を注いで、前進的な面をそれとの関連において理解するように期するのが真にあるべき歴史研究の態度である。」それ故に、「歴史学と民俗学とはひとしく歴史過程の中で対象領域を異にしながらも、結局は民俗学は歴史学として見きわめなければならないものだと思う②」以上のような考古学と民俗学の性格から「考古学や民俗学は同じ歴史科学である③」といえるであろう。従って、歴史博物館の中に考古、民俗学の両博物館が含まれると考えたのである。

- ① V. G. チャイルド『考古学とは何か』近藤義郎、木村紀子訳、岩波新書, 1969年。

- ② 和歌森太郎『柳田国男と歴史学』NHKブックス, 1975年。

- ③ 後藤和民(共著)『博物館学講座』第一巻, 雄山閣 1979年。

- (19) 歴史的な意味が表明されておらず、ただ、歴史的実事が列挙されているだけならば、それを歴史叙述と呼ぶことは難しい。何故ならば「歴史家というのは、自分の解釈にしたがって自分の事実を作り上げ、自分の事実に従って自分の解釈を作り上げるという不断の過程に巻き込まれる※」ので、構成された歴史(叙述)には、事実と、それに密接に結びついた解釈とが含まれているはずだからである。

※ E. H. カー『歴史とは何か』前出

- (20) 博物館の3大機能と言われている①保存(収集も含む)、②調査研究、③教育・普及は互いに不離密着、相互扶助の関係にあり、ある機能を軽視すると、全体の機能がダウンする結果になる」だけではなく、「博物館である以上は研究活動はすべての博物館活動の基盤である①。」

たとえば、資料の収集、保存と調査研究との関係について見てみると、「調査研究と資料収集の関係はともにかみあって機能するものであり、収集機能がまずいたら、調査研究機能がそれに附随するのではなく、むしろ基本的には調査研究の産物として資料が収集され、その結果がさらにつぎの段階の資料収集に

ひきつがれてゆくものである②。」つまり、「資料は調査や研究を遂行していく過程で、ある意味では必然的・結果的に集まるものである③。」

また、次に調査研究と展示の関係について見るならば、「博物館の展示の場合は『研究は展示』、『展示は研究』であらねばならないと考えている。したがって、私は、こと博物館の展示は、研究所の思想(考え方)の最も適切な表現手段の探求であり、その具体化につとめることにあると考えているのであり、その実現につとめたいと言えるのである④。このように、展示が研究者の思想の表現手段となるためには、展示で表現される思想がすでに用意されていなければならない。つまり「調査や研究は『あわせて』するものではなく、展示に先行してまずすべきものである⑤。」と言える。

以上より、調査研究活動は、博物館活動の基盤であること、及び調査研究が行われなければ、「価値とか思想の提示や表現⑥」である展示は存在し得ないということがわかるであろう。

①新井重三(共著)『博物館学講座』第1巻, 雄山閣, 1979年。

②千地万造(共著)『博物館学講座』第5巻, 雄山閣, 1978年。

③新井重三(共著)『博物館学講座』第7巻, 雄山閣, 1981年。

④佐々木朝登「展示, その計画を中心として」博物館研究Vol. No 5, 1976年

⑤⑥新井重三(共著)『博物館学講座』第7巻, 前出

②① 歴史叙述とは、「確かな事実」というものを集めれば成立するというものではない。「われわれの問題関心に出發して絶えず歴史に問い、史実によって答えられ、或いは修正され、否定されて、再び問いかける①」過程を経て、歴史像が構築され、歴史叙述がなされるのである。ある歴史叙述が存在するためには、その歴史叙述に固有な問題関心に端を発した研究の積み重ねが存在しなければならないのである。つまり、研究は、歴史叙述にとって必要不可欠な存在である。

なお、このことは、E. H. カー氏の次の言葉からも明らかである。「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることの知らない対話なのであります②。」

①齊藤孝『歴史と歴史学』

② E. H. カー『歴史とは何か』前出

②② 「歴史博物館は、歴史資料を収集し、それを展示し、

管理しておれば良く、資料の調査、研究などは行う必要がないという考え方を持つ人が以外に多いのには驚きである。

現に博物館は、研究機関ではなく社会教育機関であるから、調査、研究は研究所などの機関に委ねればいいとする趣旨の発言をなすものもある。」安井良三、岩井宏實(共著)『博物館学講座』第5巻, 雄山閣, 昭和53年。

②③ 歴史叙述にとって歴史観が不可欠であることを神山四郎は次のように述べている。「歴史家が事実を見るとき立場、その中からある事実を選択するときの選択基準、それをある原理から解釈するときの解釈原理それにある価値を与える価値観などをひっくり返して『歴史観』と呼ぶといったが、たしかに、そのような歴史観がなければ歴史は書けない①。」また、茅野良男は、歴史観を人間観、世界観という表現と言い換えて「過去の事実ならびにその関連の意味づけに関しては、結局その歴史叙述家の人間観が正面に出て来る。事実そのものの列挙とそれに基づく統一的な歴史像が提出されたとき、その歴史像全体の意味づけを行なうのは、その叙述家の世界観であり人間観である。

歴史叙述は叙述する主体を欠きえない。過去の事実の探究と価値づけ、意味づけは歴史叙述の主体の人間観、世界観を欠きえない②。」なお、歴史叙述の主体、すなわち、歴史探求の立場とが、歴史叙述にとって必要不可欠であることは、先に引用した。E. H. カー、齊藤孝、和歌森太郎の主張する所でもある。

①神山四郎『歴史の探求』NHK市民大学叢書1, 1968年。

②茅野良男『歴史のみかた新装版』紀伊国屋書店, 1980年。

②④ 「不可解なことに、従来博物館で史観の問題が真剣に論ぜられたこともなく、むしろ、それが一種のタブーとされていた向きさえあった。これはまさに愚かなことで、博物館とでもそこで歴史を扱う以上、史観こそは決して避けることのできない必然的な前提である。後藤和民(共著)『博物館学講座』第一巻, 前出

②⑤ 『博物館学講座』第1巻(前出)に掲載された、『博物館に関する基礎調査』(日本博物館協会, 1977年)によれば、65の歴史展示替えの必要性、①研究の進展による展示内容の変更、②展示資料の寿命②」としている。

①佐々木朝登(共著)『博物館学講座』第7巻, 前出

②新井重三(共著)『博物館学講座』第7巻, 前出

②⑥ 齊藤孝『歴史と歴史学』前出